

## 第 50 回文化講座

# 聖域へのアプローチ

～考古学から何が見えてきたのか～

【日時】 平成24年2月12日（日） 13：30～16：30

【会場】 沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

# 沖縄県立埋蔵文化財センター

## 第50回文化講座

「 聖域へのアプローチ ～考古学から何が見えてきたのか～ 」

平成24年2月12日(日) 13:30～16:30

13:30～13:40 所長あいさつ

沖縄県立埋蔵文化財センター所長 大城 慧

13:40～14:10 「グスクと聖域について

ーグスクに見られる聖域の様相ー」

沖縄県立埋蔵文化財センター 主任 山本 正昭…… 1

14:10～14:40 「斎場御嶽の調査成果」

南城市役所 観光・文化振興課 主幹兼係長 大城 秀子…… 7

14:40～15:10 「首里城京の内跡検出遺構について

ー平成6年度の遺構を中心にー」

沖縄県立埋蔵文化財センター 調査班長 金城 亀信……11

15:10～15:25 休 憩

\*\*\*質問用紙は休憩時間に回収しますので、それまでにご記入下さい\*\*\*

15:25～16:25 シンポジウム

コーディネーター 當眞 嗣一(元沖縄県立博物館長)

パネリスト 山本 正昭

大城 秀子

金城 亀信

# グスクと聖域について

## —グスクに見られる聖域の様相—

沖縄県立埋蔵文化財センター

主 任 山 本 正 昭

### はじめに

沖縄本島及びその周辺離島においては 223 ヶ所の「グスク」と名が附される遺跡が存在している（沖縄県教育委員会 1983）。それらは一様に存在しているのではなく、世界遺産に登録されているグスクに代表されるような堅固な石積みで囲われた城塞的性格を有したものから人工的な構築物などは配置されていない岩塊までそのあり方は様々である。この多様な形態で存在するグスクを理解する上では単一的な意味付けを求めることは困難であり、多義的な意味を有していることへの理解が前提となってくる。仮にその前提を無視してしまうとグスクとしての実態が掴めないどころか、グスクの一要素を他の要素との関係を吟味しないでそれがグスクの本質であると捉えてしまう。やや難しい表現になってしまったが、かみ砕くとグスクには様々な意味合いが含まれており、それを理解しないとグスクの本質には迫ることができないということである。

今回の発表はグスクの中でも聖域としての側面に光を当て、グスクから読み込める聖域についてその実態と変容について考えて行くものである。「グスク」と名が附される遺跡の範囲内には「御嶽」や「殿」、「神アシャギ」等の聖域的空間を含む事例が多く見られる。しかし、これらの聖域的空間について詳しく触れた研究はそれほど多くは見られない。このことから聖域的空間とグスクに見える他の要素との関係性並びにその聖域的空間が意味するものについて検証を加え、それらの時代的変容から読み取れてくるグスクにおける聖域の実態について踏み込んでいくものである。

## 1. グスクに見られる聖域に関するこれまでの考察

### ①鳥越憲三郎『琉球古代社会の研究』三笠書房 1944

平和的村落間に存在した均衡の破綻、地方的君主の台頭、群雄割拠、各地における築城といった時代的様相を「城郭時代」とした。主に鳥越は祭祀構造からの視点で考察を行っており、政治主権が巫女の兄弟とする根人から按司へ移譲され、宗教的主権をも掌握させていく時代的変革があるとした。その中では按司が拠る場所としてグスクを挙げている。

### ②グスク論争に見られる聖域論

1) 仲松弥秀「グシク考」『沖縄文化』第5号 沖縄文化協会 1961

グスクを聖域すなわち共同葬所として位置付けを行う。それは歴史地理学、民俗学の側面から集落空間構造の論理に則した形でグスクの要素を含み込む形で解釈している。また具体的に「狭小な家も建てられない」、「出口が1カ所しかない」という理由で城としての性格を否定する。

※嵩元政秀「グスクについての試論」『琉大史学』創刊号 琉球大学史学会 1969

グスクをA式=支配者の居城と認められるグスク、B式=その発生、興亡すら文献上、口碑上不明確な点の多い野面積みの石垣遺構を持つグスク、C式=遺物の見られない、または、出土してもB式の遺物より後世のそれしか出土しないグスク、さらに「やらざもりぐすく」（砲台）のような特殊なグスクの3分類を行う。さらにB式グスクを出土遺物の様相から「原始社会の終末期から古代社会に移行する時期の、防御用の、または自衛意識をもって形成された集落」とした。

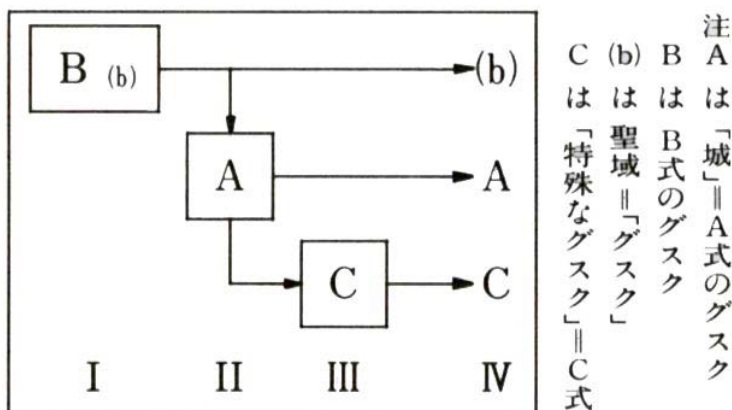
2) 国分直一「『グスク』をめぐる問題」『南島考古』創刊号 沖縄考古学会 1970

崖側が葬地として利用されていることや集骨して祀る祭地を成しているという点で仲松の聖域説を支持。「比較的広いグシクといえども水の便がなく居住は極めて困難」を主な根拠に嵩元の集落説を否定。但し、有事の際に拠点と成り得る可能性を示唆する。

3) 高良倉吉「沖縄原始社会史の諸問題」

『沖縄歴史研究』第10号 同研究会 1973

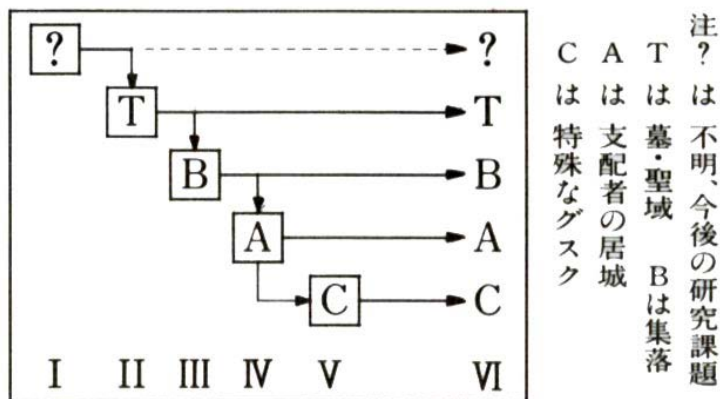
グシク・モデルを提唱。城郭説、仲松の聖域説、嵩元の集落説は共同体論的な視点と時間軸的視点からでは対立しないとした。嵩元のB式グスクを聖域に抽象化されるどころの「血縁」の原理によって成立しているものとした。またグスク論と村落共同体論が深く結びつくことを指摘。グスク時代は沖縄原始社会史の総括であり、また古代社会への契機を論じるものであると提起する。



第1図 高良倉吉氏のグスク・モデル

4) 友寄英一郎「再グシク考」『南島考古』第4号 沖縄考古学会 1975

グシク・モデルを提示。ダイアクロニック的（時間軸）理解と名称の問題を提示。グシクは名称として概念的に広がりをもつ、言語的概念転化が見られるとした。



第2図 友寄英一郎氏のグスク・モデル

③小島瓊禮「沖縄の聖地」『現代宗教』第3号 春秋社 1983

グスクに見られる聖域「御嶽」を本土の山岳信仰と類似していることを指摘。また「グスク」の語源に関しては石積み、もしくは加工された岩山を指す言葉であり、グスクの性格とは別に石造物が構築されている形態を表していると解釈する。更に山岳信仰の性格を有するグスクの内、政治的、軍事的な立地条件に合ったグスクが城塞的グスクとして変化していったことを指摘。

④武部拓磨「城塞的グスクにおける聖域の考察」

『よのつじ 浦添市文化部紀要』第5号 浦添市教育委員会 2009

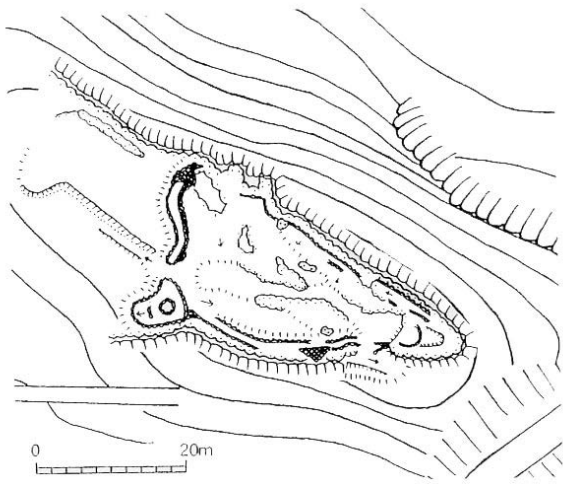
グスク内にある頂上部にある自然岩に着目。グスク成立以前から成立以降にかけて意識的に自然岩が残されていることを指摘。拝所の本体として機能していることからグスクの信仰的背景に山岳信仰があったと想定。また信仰の対象となる自然岩が残されていない城塞的グスクにおいても聖域的側面を考慮して議論すべきことを提起。

## 2. グスクと聖域についての論点

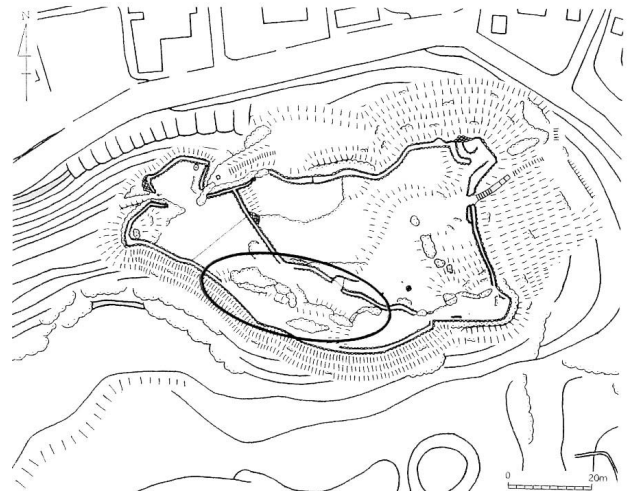
- ① 聖域を考えていく上で精神文化についての解釈が重要となってくるが、グスク時代においてはその当時の精神文化を考えていくだけの資史料に乏しい現状がある。
- ② 物質文化を通して見出される聖域とはどのようなものか、グスク内から観察できる聖域の要素を抽出する必要がある。
- ③ 聖域的要素の抽出においては現在、使われている聖域を構成する要素から見出す必要がある。
- ④ 現在の御嶽を構成する要素として、岩塊を御願の対象とする御嶽の「イベ（威部）」がある。それらの多くは屹立する岩盤をそのまま利用したものであり、構造物としての性格を持ち得ないものである。

### 3. グスクにおける非削平地について

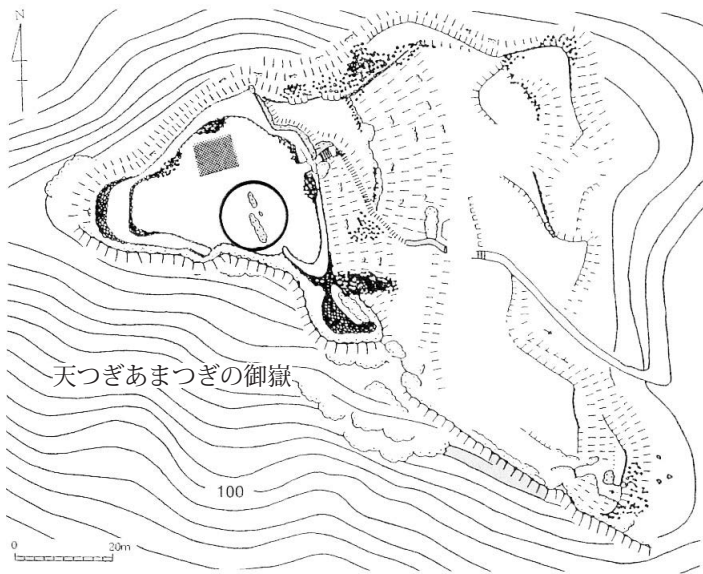
石積みを有するグスク内部には規模の大小に関わらず非削平地が存在する。その位置や範囲、そして現状における用途について平面プランから概観していくことにする。



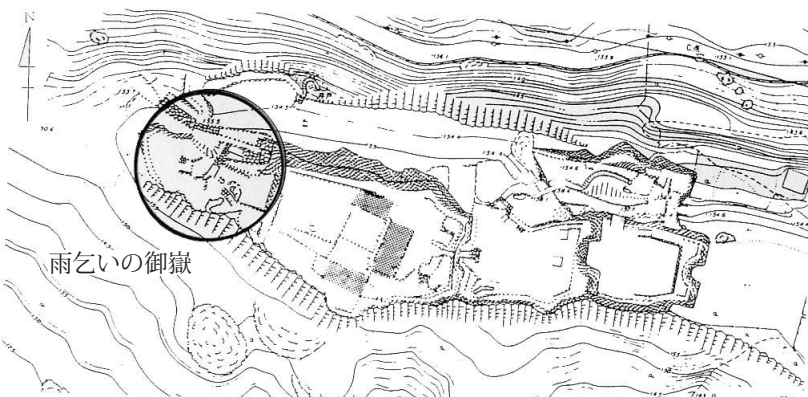
第3図 當間グスク平面概要図



第4図 垣之花グスク平面概要図 (円内は非削平地)



第5図 玉城グスク平面概要図 (円内は非削平地)



第6図 中城グスク平面概要図 (中城村教育委員会 1982 を一部改変) ※円内は非削平地



## 4. まとめ

### 【参考文献】

- 鳥越憲三郎 1944 『琉球古代社会の研究』 三笠書房
- 仲松弥秀 1961 「グシク考」『沖繩文化』第5号 沖繩文化協会
- 嵩元政秀 1969 「グスクについての試論」『琉大史学』創刊号 琉球大学史学会
- 国分直一 1970 「『グスク』をめぐる問題」『南島考古』創刊号 沖繩考古学会
- 高良倉吉 1973 「沖繩原始社会史の諸問題」『沖繩歴史研究』第10号 同研究会
- 友寄英一郎 1975 「再グシク考」『南島考古』第4号 沖繩考古学会
- 鎌倉芳太郎 1976 『セレベス・沖繩 発掘古陶瓷』 国書刊行会
- 中城村教育委員会 1982 「中城城跡」『中城村の遺跡』第1集
- 沖繩県教育委員会 1983 「ぐすく—沖繩本島およびその周辺離島—」  
『沖繩県文化財調査報告書』第53集
- 小島瓊禮 1983 「沖繩の聖地」『現代宗教』第3号 春秋社
- 読谷村教育委員会 1986 『座喜味城跡環境整備事業報告書』
- 玉城村教育委員会 1991 「糸数城跡—発掘調査報告書Ⅰ—」  
『玉城村文化財調査報告書』第1集
- 玉城寿 2004 「民俗祭祀からみたグスク—今帰仁グスクを中心にして—」  
『グスク文化を考える』新人物往来社
- 山本正昭 2004 「グスクにおける石積み囲い内の構造について」  
『グスク文化を考える』新人物往来社
- 武部拓磨 2009 「城塞的グスクにおける聖域の考察」  
『よのつじ 浦添市文化部紀要』第5号 浦添市教育委員会



# 齋場御嶽の調査成果

南城市役所 観光・文化振興課  
主幹兼係長 大城 秀子

## はじめに

齋場御嶽は首里城の東南東、約 12 km の距離にある南城市知念字久手堅に所在する。

第二尚氏王統の第三代王：尚真（在位 1477 年～ 1526 年）は、琉球に古くから伝わる祖先信仰や自然崇拜の信仰に根ざす神女たちを再編成し、国王の近親女性が就任する琉球最高神女である聞得大君を頂点とする国家的な宗教組織を整備した。

齋場御嶽は聞得大君との関係が深い格式の高い御嶽で、中央集権的な王権を信仰や精神面から支える国家的な祭祀の場として重要な役割を果たした。正確な創建年代は不明であるが、『中山世鑑』には、琉球開びやく神アマミクが創設した七御嶽の一つであると記されている。15 世紀にはすでに国王が齋場御嶽へ巡幸しており、聞得大君の「お新下り」儀式も行われるなど、王国にとって重要な聖地となっていた。

## 概要

御嶽内には、大庫理（うふぐーい）、寄満（ゆいんち）、三庫理（さんぐーい）等の基壇と拝所があり、石畳道の参道で結ばれている。

15 世紀には国家の安泰を祈る祭祀場として整備され、第二尚氏王統の国王による参拝が 17 世紀まで継続的に行われた。管理は王府から任命された役人と地元の神役があたり、樹木の伐採等が禁止された。

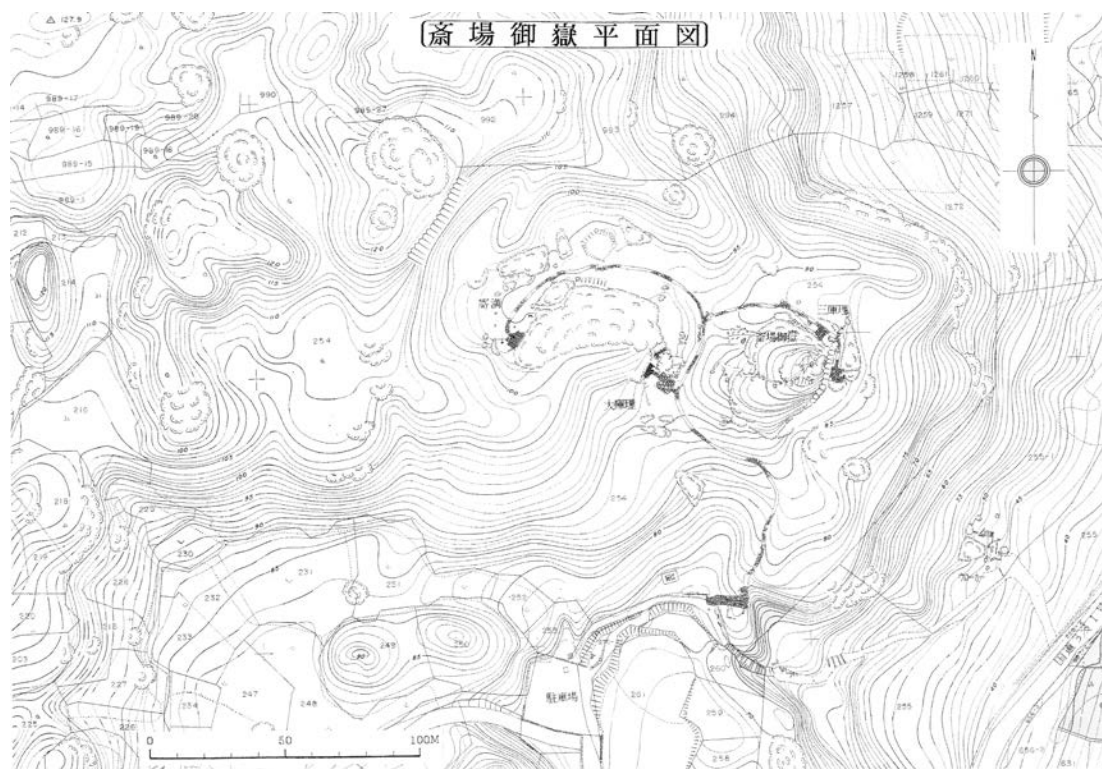


図1 齋場御嶽平面図

## 調査の成果

齋場御嶽では平成6年から13年度にかけて、文化庁補助による史跡整備事業が実施された。損壊した遺構修復が目的であり、それに先立つ確認調査が行われた。御嶽全体としては参道や基壇、それに付随する排水等のほかに人工的な造築物はなく、自然地形を活かし、周辺の植生や自然岩を取り込んだ配慮がなされている。

自然を活かした拝所であり、構造物や発掘調査で得られた出土資料もグスクに比べて少ないが、以下に述べるような大きな成果が得られた。

### ○大庫理

御嶽の入口から参道を登った最初の拝所である。第二次世界大戦時に米軍の艦砲射撃を受け、大岩が参道や基壇の一部に覆いかぶさる被害を受けた。

調査においては、岩塊の撤去と磚敷きになった前庭部分と、排水遺構を確認した。使用された石材は、国道から東海岸のビーチロックと、御嶽周辺の石灰岩が使われたことが地質学者により確認されている。

また基壇の右側には、明治末期～大正時代初めに赤瓦葺きの小さな拝殿があったとされる。調査においても戦前まであったとされるその祠の屋根瓦細片が採集された。

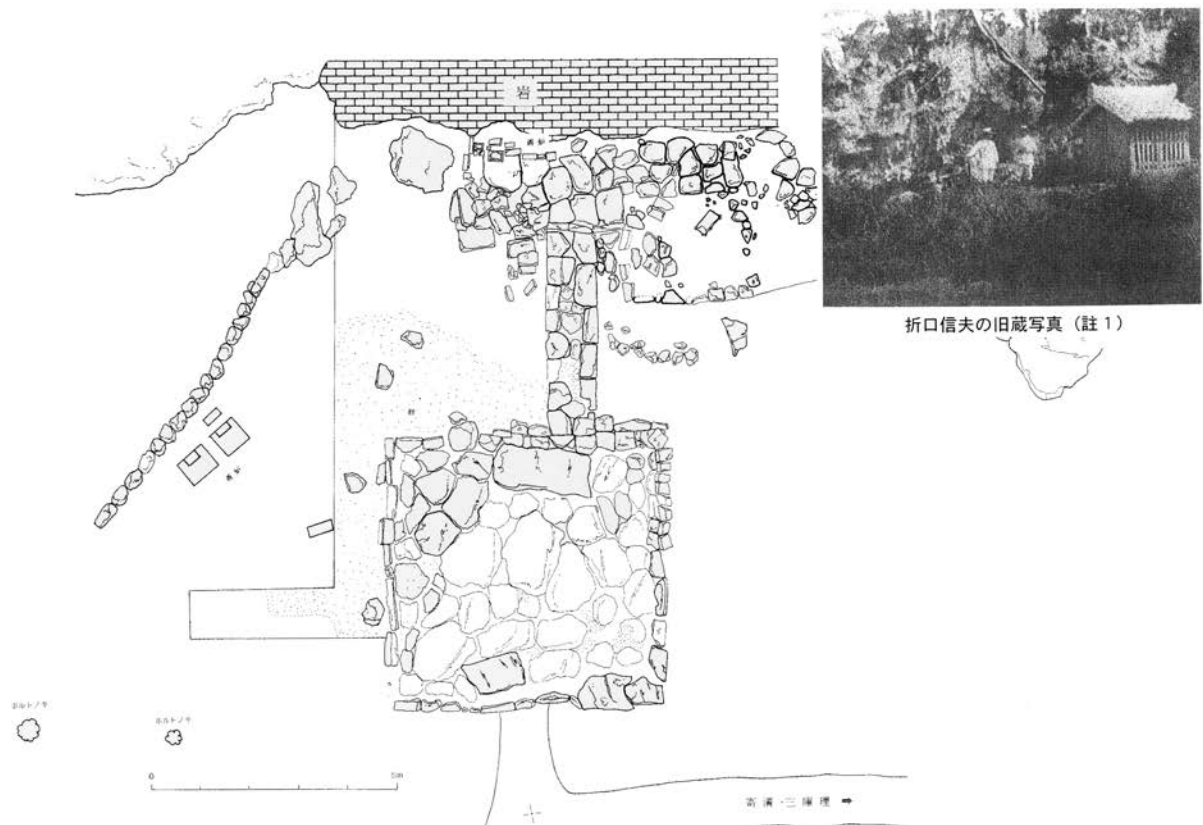


図2 大庫理の遺構露出状況(右上の写真は、大正時代に本地を訪れた折口信夫)

## ○寄満・参道

基壇は自然の風化による損壊があり、その攪乱層から銭貨等の資料が僅かに得られている。石畳の参道は、戦時中の砲弾を受けて破壊された状況が確認された。参道全体には往時の行事に伴う整備で珊瑚バラスが厚く敷かれ、御嶽全体に同様の状況が見られた。

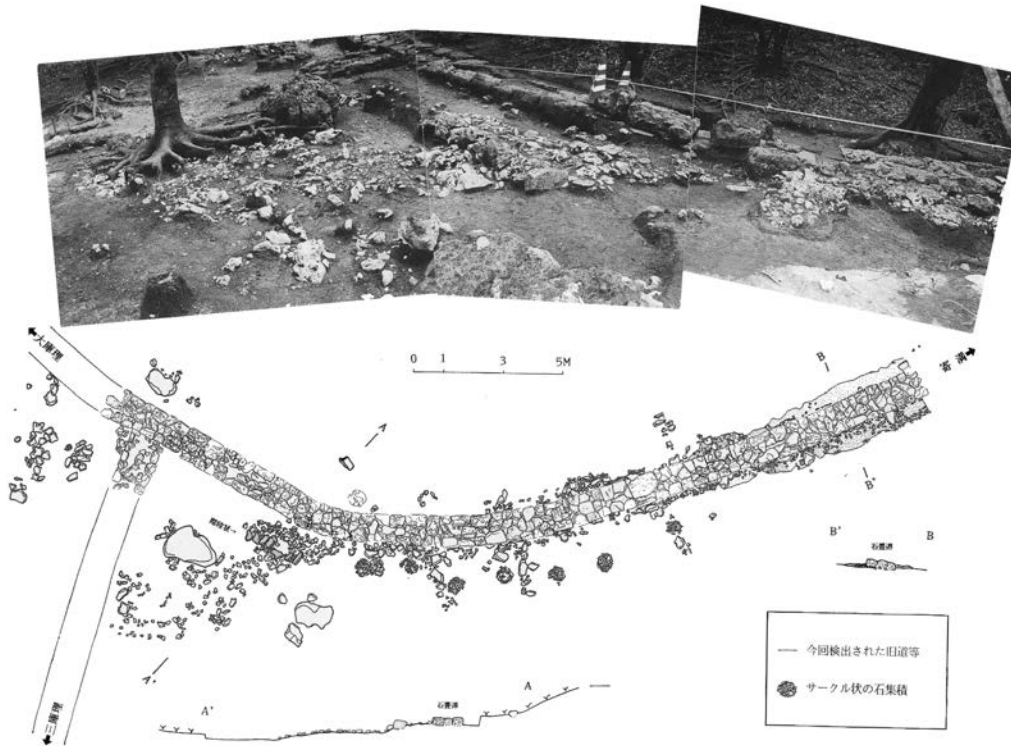


図3 寄満へ続く旧道遺構

## ○三庫理

本地区は齋場御嶽の中心となる場所で、三角岩とその周辺部に拝所が集中しているシンボリックな場所である。その岩間にある石畳道の下層からは弥生期相当の資料が確認され、当時の祭祀儀礼があったことを伺わせる資料が出土した。

上層からは、本地区で最も注目をあびた金製勾玉を含む一括資料（すべて完形品）が出土した。金製勾玉（3点）を含む9点の勾玉、中国製青磁器、金製厭勝銭、銭貨が得られ、これらは何らかの「鎮めの儀式」で使用されたとみられている。類例として、園比屋武御嶽石門から出土した銭貨と今帰仁城跡本丸から出土した青磁碗がある。

## おわりに

齋場御嶽では平成4年度に基本構想・基本計画を策定後、平成6年度～13年度に保存修理事業を実施してきた。平成18年には合併して南城市となり、市の総合計画や観光振興計画、都市マスタープランにおいて「保存・継承・活用」の大切な拠点として位置づけられている。さらに、平成23年には歴史文化基本構想・保存活用計画においても重要な地点とされている。

しかし、齋場御嶽周辺地区や付随する歴史の道など、まだ解明されていない場所もあることから、今後の計画的・継続的な調査と保護・活用の推進が望まれている。



三庫理の排水遺構



大庫理の遺構露出



石畳道の露出状況

# 首里城京の内跡検出遺構について

—主に平成6年度の遺構を中心に—

沖縄県立埋蔵文化財センター

調査班長 金城 亀信

## 1. はじめに

首里城跡（第1図）は那覇市首里当之蔵に所在し、標高100～135mの琉球石灰岩の丘陵上に築かれた琉球国王の居城であった。首里城の規模は、東西370m、南北213m、面積46,167㎡と県内最大規模のグスクであった。築城時期は、14世紀頃に中山王察度によって築城された伝承があるが定かではない。1406年に尚巴志が中山を攻略し、察度の子武寧を滅ぼし、琉球王国の支配の拠点としてはじまった。尚巴志以来、最後の琉球国王となった尚泰が明治政府に首里城を明け渡した1879年の琉球処分までの約500年間に亘って琉球王国の王宮として、政治・文化・経済の中核として機能した。

戦前の首里城は、1925年に正殿などが国宝指定を受けるが、1945年の沖縄戦で消失した。戦後は1950年に琉球大学（キャンパス）が創設され、1982年までの32年間利用される。

1972年に本土復帰の際に沖縄県が、首里城及びその周辺文化財を戦災文化財として復元整備計画を立案し、復帰直後から「首里城城郭等復元整備事業」が沖縄開発庁の補助で、首里城歓会門復元整備から始まり2001年までの29年間を要して、木曳門・継世門を含めた外郭城壁1,080mが復元された。

首里城内郭は、1984年に沖縄県が「首里城公園基本計画」を策定し、その中で正殿などを含む建造物群の復元が検討された。1986年に首里城公園計画区域の約18haの内、城内内郭の約4haを沖縄県の本土復帰を記念する国の「都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）」として復元整備を実施することが閣議決定された。1992年に遺構調査の成果などを踏まえて正殿を含む建造物群の復元され、内郭の一部が公開されている。

このような中で、首里城内で最も重要な聖域であった「京の内」地区の復元整備が検討され、復元整備に必要な基礎資料となる遺構確認の発掘調査が、1994（平成6）年度～1997（平成9）年度までの4カ年間に亘って調査を実施した（第1図）。

## 2. 首里城京の内地域の主な歴史と考古学研究小史

首里城と京の内に関係する主な事項を下記に記す。

- ① 1372年：中国明王朝洪武帝の招諭を受けて中山王察度が泰期を遣わし初めて進貢（1）
- ② 1392年：察度が数十丈の高楼“高ヨソウリ（高世層理殿）”を造り遊観する（2）
- ③ 1406年：尚巴志が中山を攻略し、察度の子武寧を滅ぼす（2）
- ④ 1416年：北山の攀安知を滅ぼす（2）
- ⑤ 1427年：尚巴志が首里城周辺の安国山に龍潭を掘り、華木を植える（3）

- ⑥ 1429年：南山の他魯毎を滅ぼす（2）
- ⑦ 1453年：王位継承問題で起きた志魯・布里の乱（2）
- ⑧ 1459年：『明實録』（3）英宗實録、卷301「天順三年三月癸未朔<sup>ついたち</sup> [甲申] 禮部奏・琉球國中山王尚泰久奏稱本國王府失火。延焼倉庫銅錢貨物・・・」
- ⑨ 1576年：天界寺（守礼門と玉陵の中間）失火し、高樓（高よそうり殿）炎上（4）
- ⑩ 1936年：伊東忠太・鎌倉芳太郎両氏による城内4箇所〔A：西ノアザナ東南側下文字瓦層、B：京ノ内西北側下（西）、C：京ノ内西北側下（東）、D：正殿前〕の発掘調査。B：京ノ内西北側下（西）の調査で、「此の地点は、出土品より見て、弘治5年（西紀1492年）以降、それより程遠からぬ時代に埋蔵され、出土品は略ぼ成化、弘治の頃のものが多いと想定される。」と報告している（5）。
- ⑪ 1962年：大川清氏による西ノアザナ発見の古瓦の調査と高麗系古瓦などの研究・分析がある（6）。
- ⑫ 1965年：多和田真淳氏による「首里城の古銭と首里遷都」（7）で、考古学的見地と編年研究から「察度王の築いたと思われる古城（後代の京の内）が破壊された時も、（中略）首里へ移った察度が（中略）他の貿易権の共存を認めた。（中略）首里城、勝連城、崎山子屋敷跡から第三様式の高麗瓦が出土するのは、その証左だと考える。中略）したがって察度王が首里城に移ったころ（1350年－1360年）にはまったく須恵器は影をひそめてよいわけである。」と記している。
- ⑬ 1971年：多和田真淳氏は「古都首里と古凶」（7）で、「察度は新首里城の京之内に当たる部分（首里城団塊の南の端）に旧首里城を建設した。（中略）第一尚氏になってから旧首里城は廃止されもっぱら神事用の京之内として利用され、新首里城へと大拡張されたのである。」また、多和田氏は「浦添から首里に主都が移ったのは察度王即位のころで、彼は後世の首里城内にあった京之内といわれた所に城を築き、有名な「たかよそうり」という高樓を建てたのである。彼は『癸酉年高麗瓦匠造』と大天の銘のある高麗瓦を浦添城から運び、（中略）京之内の古城が拡大され、名実ともに城らしくなったのは尚巴志時代であろう」と記している。
- ⑭ 1986年：亀井明德氏は、「明代華南彩釉陶をめぐる諸問題」（8）で、伊東・鎌倉の両氏が報告した明代華南彩釉陶の研究から「沖縄から（中略）とりわけ三彩水注などにこのボルネオの『聖なる器』と共通する文化要素が存在したのであろうか。（中略）とりわけ首里城の大量の出土品に注目したい。（中略）京の内が神事用地である点に注意したい。（中略）この京の内で行われた神事とは、王権の交替に伴う祭事といえる。首里城内で発見された大量の華南彩釉陶が、東半分の殿舎の付近ではなく、この祭事の場の付近であったのは、まさしく、これらが新しい支配者を選挙する世謡の際に使われたことを推測させる。（中略）これらの陶器が琉球において新しい支配者の推挙に伴う祭事に用いられた聖器であるとする見解を提起したい。」と記している。
- ⑮ 2009年：上原静氏は、「首里城西のアザナ跡の鍛冶・鑄造工房」（9）で、鍛冶・鑄造工房の時期を「当該地区の上限を示す出土陶磁器の14世紀後半から15世紀前半は、首里城内の他地区における造成層にみる出土状況とも共通し、高麗・大和系

瓦も含み、(中略) 他方、下限を現す出土陶磁器の17世紀資料は3片と僅少で、(中略) 造成終了以降に混じったものと考えられる。(中略) 主たる15～16世紀の陶磁器年代が操業活動期で、灰色を帯びる湧田系瓦と後に流行する赤色瓦を考慮すると、遅くともその停止と関連施設の廃棄が17世紀頃に行われ、更地になっていたものと考えられるのである。」と記している。

### 3. 首里城「京の内」とは

#### 1) 「京の内」の語義

「京の内」は、首里城内郭の南西側にある最も神聖なる祭祀や儀式をおこなう空間である。京の内の語義として「けお(きょう:京)」は、「セジ(霊力)」の同義語として考えられ、“神または神の霊力”の意味を持っている(10)。また、民俗学では、神が降臨する大岩の頂上やシマ前(集落海岸近く)の岩島・小島を「京:きょう」と称している(11)。その他、南城市知念の齋場御嶽内の三庫理に入る右手側の岩の頂上を“キヨウノハナ(ギョウノハナ)”と称し、大岩直下の香炉から岩の上の“キヨウノハナ”を拝み、香炉の側にあつたクバ(ビロウ:ヤシ科の常緑高木)の神木を足掛かりにしてアマミキョが天降りされた(12)などの事例からも「京の内」の「きょう」は、神が降臨、若しくは来訪する場所の意味合いがある。次に京の内の「うち(内)」は“聖域”・“区域”などの意味があることなどから推察すると京の内は「神が降臨する聖域」として理解される。

#### 2) 「京の内」の御嶽

京の内に所在した御嶽は、基本的に五つの御嶽(第2図)で構成されていて、京の内の最も高い位置(標高135m)に「首里森御嶽(神名:玉ノミヤ御イベ)」、岩山の洞穴部分に「真珠森うたき御嶽(神名:真玉城の玉のみやの御イベ)」がある。この両御嶽が首里城の別称(聖名)となった「首里森ぐすく」或いは「真珠森ぐすく」と称されているのもこの御嶽の名前に由来する。その他、この二つの御嶽の創設に関する由来では、沖縄のかい開びやく闘しん神アマミキョが造った御嶽(13)とされている。また、“京の内之三御嶽(神名:きょうのうちしきやちしきやたけ御イベ、きょうのうちのあかるいの御イベ、きょうの内のそのいたしきの御イベ、の三神)”と称される三つの御嶽(13)があった。これらの「京の内」にあった五つの御嶽は、発掘調査で確認された石積み遺構などを基本にして、2001年度から御嶽や石積みの復元工事が始まり、2003年度に復元を終え一般に公開されている。

#### 3) 「京の内」での祭祀・儀式

首里森御嶽の西側城壁は、城壁がアーチ門にすりつけられた部分がある。この部分が新国王に託宣を下す“君手摩(天神または陽神)”の神を迎える場所であったと言われている。首里森御嶽では琉球王国最高神女であった“聞得大君”を頂点とする高級神女“三十三君”が、降臨神の“君手摩”の神を迎えて、“聞得大君”を中心とした高級神女と共に歴代の琉球国王へ“世おそうせぢ(世を治める霊力)”が高まるように“オボツ・カグラ(神の居所。)”と“ニライ・カナイ(海の彼方、若しくは海の底、地の底にあってそこから神々

が来訪し、さまざまな豊穰と幸をもたらす) ”の神に祈願し、国王へ託宣を下したようである。

この京の内では、“君手摩”の神を迎えての歴代琉球国王の即位決定を初め、国王への託宣、琉球王国の重要な祭祀や儀式が行われた(14)。

参考までに第一尚氏王統(1406年～1469年)の最高神女は“佐司笠<sup>さすがさ</sup>”であったが、第二尚氏王統から地位を“聞得大君”に譲るが佐司笠は依然として高い神格があった。

#### 4. 1994年から1996年度の発掘調査概要

京の内地区の発掘調査は、1994年度～1997年度までの4カ年間に亘って調査を実施(調査面積は約5,000m<sup>2</sup>)した。この中で金城が担当した1994年～1996年までの三カ年間調査をおこなった際に検出された主な遺構などについて概要を記す。これらの遺構は、今後の資料整理の進捗等で遺構の年代観において修正や見直しが必要である事を前提に報告する。

1994年度～1997年度までの京の内地区の調査で、14世紀中頃～15世紀中頃迄の遺構としては、野面積みの石積み、基壇、倉庫、瓦葺きの建物などの遺構が存在したようである。

1994年度の遺構については、出土遺物や遺構の切り合い関係から第Ⅰ期～第Ⅵ期までの6期(第3図)に大別して、以下に記す。

- ①第Ⅰ期(14世紀前半～14世紀後半頃)の遺構(第4図)：野面石積み1基。琉球石灰岩を掘り込んだピット様の穴9基。
- ②第Ⅱ期(14世紀終末～15世紀前半)の遺構(第5図)：基壇付建物1基。区画石積み1基。土壇1基。
- ③第Ⅲ期(15世紀中頃)の遺構(第6図)：区画石積み5基(内、1基は御嶽)。倉庫跡(南側に階段が取り付く)1基。
- ④第Ⅳ期(15世紀後半～16世紀初頭)の遺構(第7図)：区画石積み7基。石敷き遺構2基。
- ⑤第Ⅴ期(16世紀前半～19世紀後半)の遺構(第8図)：区画石積み5基。塼瓦敷遺構1基。
- ⑥第Ⅵ期(19世紀終末～昭和58年)の遺構(第9・10図)：首里第一尋常高等学校校舎と便所跡2基。同小学校関連の建物1基。琉大時代の遺構(法文学部校舎基礎石積み2基。建物基礎26基、排水溝5基。植栽穴3基)36基。

これらの遺構で、第Ⅰ期～第Ⅳ期までの時期で、主な遺構を挙げると、

- ①第Ⅰ期：ピット様の穴は、祭祀と関連する遺構かと思われる。
- ②第Ⅱ期：基壇付建物は、南北757m(4間1尺)×東西1350m以上(7間1尺以上)、基壇の残存高1m、基壇石積みにヘラ記号(△、∟、<など)19箇所。
- ③第Ⅲ期：倉庫跡は、1459年の倉庫火災で焼けた輸入(中国、タイ、ベトナム、本土産)陶磁類が1,162個体と金属製品やガラス玉が出土した。この中から陶磁器518点(金属製品・ガラス玉一括)が、2000年6月27日付けで国の重要文化財(考古資料の部)で指定された。その他、調査区の南西隅で御嶽



の石積みが1基検出されている。

- ④第Ⅳ期：石敷き遺構2基（第11図）は、2基が切り合っていた。北側の石敷き遺構は南北330cm（2間弱）、東西980cm（5間弱）の内側に細粒砂岩製の石敷きと礎石（礎石間短軸65cm、礎石間長軸185cm）が10個想定。南側の石敷き遺構が、南北335cm（2間弱）、東西1125cm（6間強）の内側に細粒砂岩製の石敷きと琉球石灰岩製の礎石（礎石間短軸95cm、礎石間長軸163cm）が12個想定。計測した間数は、本土の尺間法では一致しないが、中国明代（14～17世紀の1尺=31.1cm）尺間法を充てると誤差は0.1～2cm以下となることからすると当該遺構は、中国明代の度量衡に基づく尺度で設計・構築された事が判明した。当該遺構の用途は不明であるが、建物を構築するには礎石の間が65cmと95cmとあまりにも狭すぎるので、建物以外の用途を考える必要がある。例えば、礎石の上に盆栽を置いた遺構、或いは儀式や祭祀の際の石火矢の発射台や飾り旗の掲揚台などを考えてみた。

1995年度の遺構で注目されたのは、瓦葺きの建物礎石である（第12図A～C）。この建物遺構（SB02）は、京の内でも最も高い地域から検出されている状況からすると察度王（1350年～1395年迄の45年間在位）が、1392年に数十丈の高楼を造り遊観した高世層理殿の礎石か、或いは1576年の家譜資料にみえる天界寺（守礼門と玉陵の間）失火し、高楼（高よそうり殿）の一部が炎上した際に利用された礎石か、いずれかの高楼の礎石として考えられる。礎石周辺から出土した陶磁器などの遺物からすると14世紀中頃～15世紀中頃までにおさまっているようであるが、礎石より上位に存在したであろう15世紀以降の遺構や遺物包含層は、琉球大学の校舎等の造成工事によって包含層や遺構のあった岩盤の削平などは損失した。

この瓦葺きの建物遺構（SB02）が構築される前は、礎石の西側で、小物用の青銅製品を製作する小型鍛冶炉（15世紀中頃）が、13基切り合いながら検出（第12図C）された。

1995年・96年度に検出された遺構で注目されたのは、洞穴遺構（SX01）がある（第12図A・D）。洞穴遺跡の入口は、自然の開口部を加工しながらある程度、入口に切石を積み上げている。入口の根石直下には板上に加工した細粒砂岩（俗称：ニービヌフニ）を横位に設定し、当該加工材の両端近くに円形状のホゾ穴（扉の支柱受け）が確認されている。洞穴内部には、灰色の塼瓦を敷いて、塼瓦を漆喰で固定したようである。更に洞穴内の大きな窪みは、野面積みを用いて窪みを塞いで新たな壁を造っていた。石積みの外面は、意図的に凹凸を付けて加工されている。加工面の窪みから漆喰の一部が残っていた事などからすると洞穴の壁は、漆喰による白壁もあったことが推定される。洞穴内の最下層（第12図D）から15世紀中頃のベトナム青花などが出土していることや塼瓦の直上からは17・18世紀の沖縄産陶器片などが出土している状況からすると洞穴内の本格的な整備は、今のところ16・17世紀頃が予想される。この洞穴について、真栄平房敬の著書である『首里城物語』（15）で、「この洞穴には、第一尚氏から第二尚氏への政権抗争にまつわる伝承がある。すなわち第一尚氏王統末の革命の際、尚徳王の世子が避難した場所であると言

われている。」また、真栄平氏は『球陽』の「腓城由来」の項を引用しながら次のように記している。「(前略) 尚徳王 (中略) 王妃・乳母・世子を擁着して以て乱難を避け、皆真玉城に隠る。(中略) この洞穴の北側5～6メートルまで離れたところに西に向かって真玉森御嶽が位置していた。(中略) 首里城発祥の地である京ノ内の丘は、かつて真玉森とよばれ、そこに築かれた最初の城は真玉森とよばれたであろうと考えられる」と結論付けている。

1996年度の調査では、“京の内之三御嶽”と称された御嶽石積みの根石及び石積みの一部が、三ヶ所で検出されている。御嶽の一つは、石積みの目地から永樂通寶(明代：1408年初鑄造)が2・3枚。他の御嶽石積みからはヤギの下顎骨や石灰岩製の円筒型三足香炉などが出土している。

## 5. おわりに

京の内地区の1994年度～1997年度までの4カ年間に亘って実施された発掘調査で出土した出土遺物の量は、コンテナ1,048箱を数え、現在も整理中である。1994年度の出土遺物を遺構毎に整理して、過年度に遺構のみを報告したが、報告済みの出土品(1998年、2009年)を除いて、1994年度の出土品の実測点数は2,000点余を数えている。今年度から1994年度の出土品の報告をおこなう予定である。その後は、1995年度、1996年度と発掘調査を刊行することで整理を進めている。

1994年度～1996年度までの報告が済めば、遺構や遺物をとおしてより京の内の利用の在り方や性格などが浮かび上がるものと理解している。今回の文化講座の内容からすると時期尚早であり、中間的報告として理解していただければ幸いである。

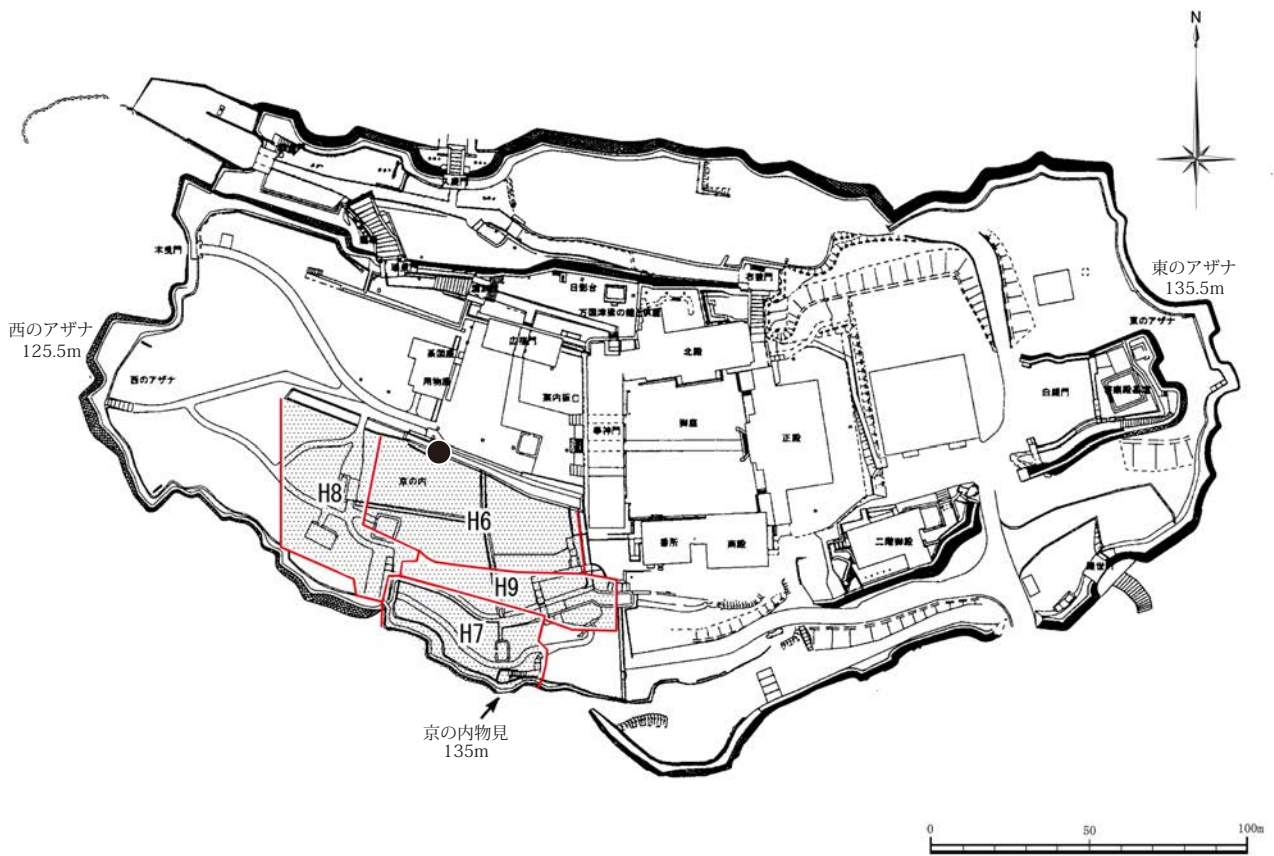
京の内地区は、多和田氏が指摘するように察度が浦添から遷都し、最初に城を築城した古城があった可能性は、十分にある。これは、第I期(14世紀前半～14世紀後半頃)の遺構である野面石積みが、その可能性を示す遺構とみられる。また、1995年度に調査をおこなった南側高所で発掘された瓦葺き建物礎石は、察度王が1392年に構築した数十丈の高世層理殿の礎石か、或いは1576年の家譜資料にみえる天界寺の失火し、炎上した高楼(高よそうり殿)の礎石かについては今後、遺構の検討や資料整理をとおして判断したいところである。

## 【註文献】

1. 日本史料集成編纂会『中国・朝鮮の史籍における日本史料 明實録之部1』国書刊行会 1979年
2. 沖縄県教育委員会『重新校正 中山世鑑』1983年
3. 沖縄県教育委員会『金石文－歴史資料調査報告書V－』1985年
- 4-a. 真栄平房敬『首里城物語』ひるぎ社 1987年
- b. 比嘉朝進『沖縄のサムレー』風土社 1990年
5. 鎌倉芳太郎『セレベス 沖縄発掘古陶瓷』国書刊行会 1975年
6. 大川 清「琉球古瓦調査抄報」『沖縄文化財調査報告 1962年版』  
沖縄県教育委員会監修 那覇出版社 1978年
7. 古希記念多和田真淳撰集刊行会編  
『古希記念多和田真淳撰集（考古・民俗・歴史・工芸編）』1980年
8. 亀井明德「明代華南彩釉陶をめぐる諸問題」  
『日本貿易陶磁史の研究』（株）同朋舎出版 1986年
9. 上原 静「首里城西のアザナ跡の鍛冶・鑄造工房」  
『紀要 沖縄埋文研究6』県立埋蔵文化財センター 2009年
- 10-a. 外間守善・西郷信綱『おもろさうし』日本思想体系 18 岩波書店 1972年
- b. 外間守善校注『おもろさうし』（上・下）〔全2冊〕岩波書店 2006年
- c. 首里城研究グループ『首里城入門－その建築と歴史－』ひるぎ社 1989年
11. 仲松弥秀『古層の村』沖縄民俗文化論 タイムス選書4 沖縄タイムス社 1977年
12. 仲松弥秀「新垣孫一翁よりの聞き書き」  
『知念城跡・斎場御嶽及び周辺整備基本構想・基本計画』知念村 1993年
- 13-a. 伊波普猷ほか『琉球国由来記』名取書店 1940年
- b. 首里城研究グループ『首里城入門－その建築と歴史－』ひるぎ社 1989年
14. 首里城研究グループ『首里城入門－その建築と歴史－』ひるぎ社 1989年

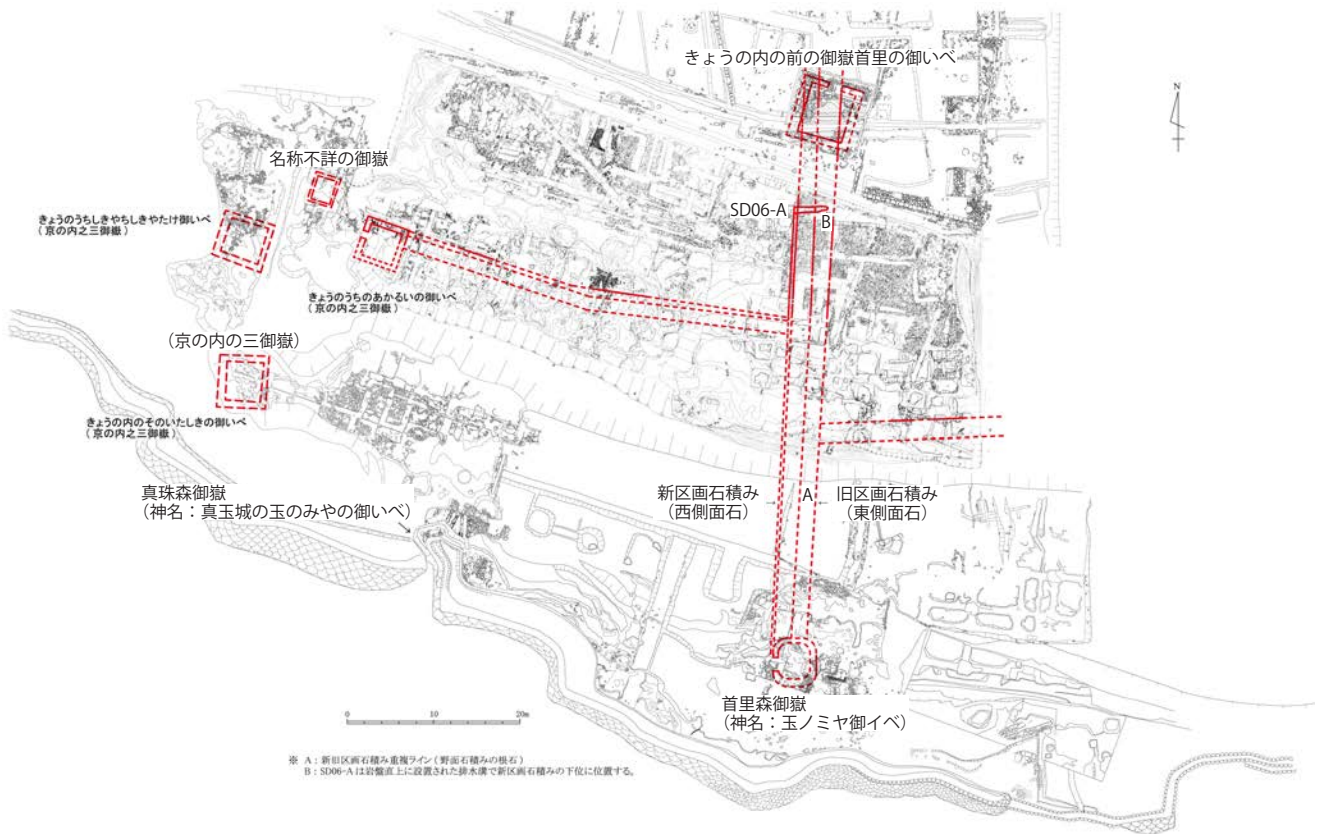
## 【参考文献】

- ◎ 當眞嗣一「火矢について」  
『南島考古』第14号（学会創立25周年記念特集号）沖縄考古学会 1994年
- ◎ 沖縄県教育委員会『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（I）－』1998年
- ◎ 沖縄県立埋蔵文化財センター特別企画展  
『首里城京の内展－貿易陶磁からみた大交易時代－』2001年
- ◎ 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（II）－』2009年
- ◎ 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（III）－』2011年



第1図 首里城跡 京の内地区年度別発掘調査箇所 (●= 1459年失火消失倉庫跡)

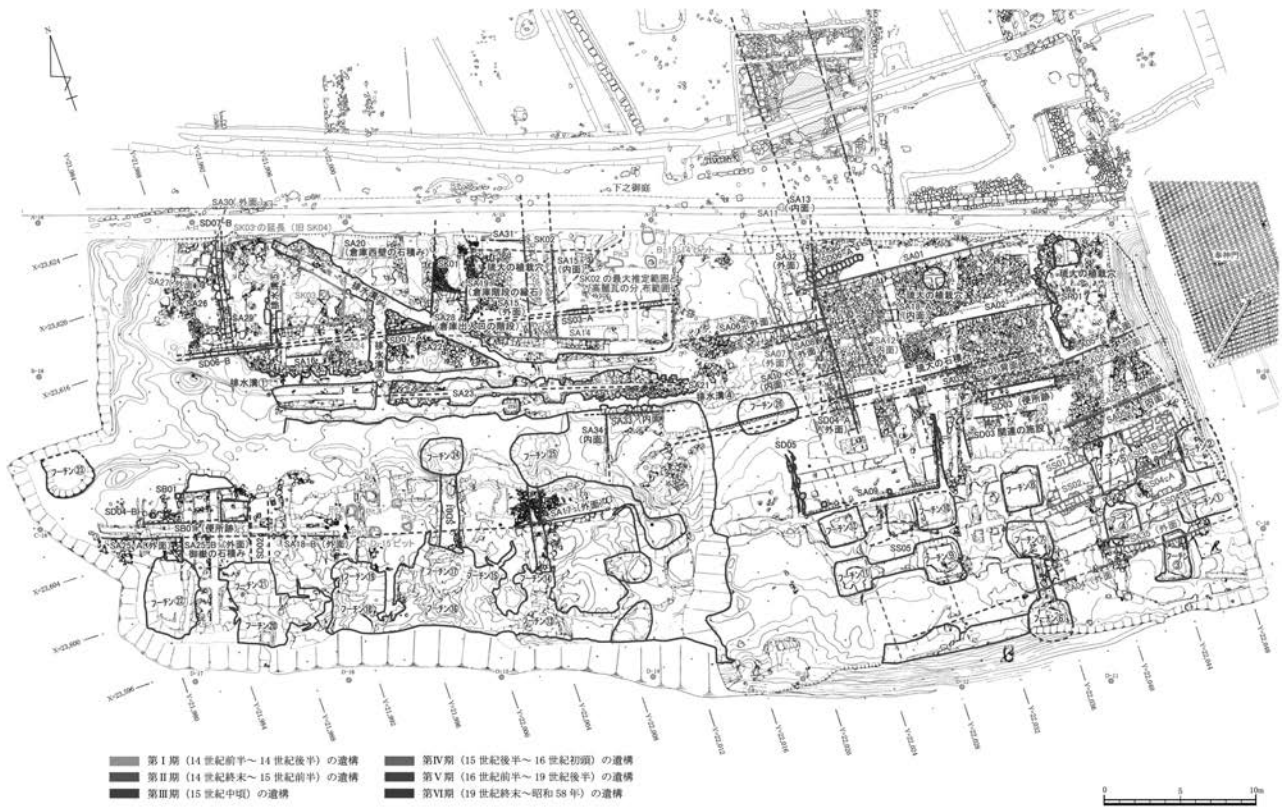
※ A: 新旧区画石積み重複ライン (野面積みの根石)  
 B: SD06-Aは、岩盤直上に設置された排水溝で新区画石積みの下位に位置する



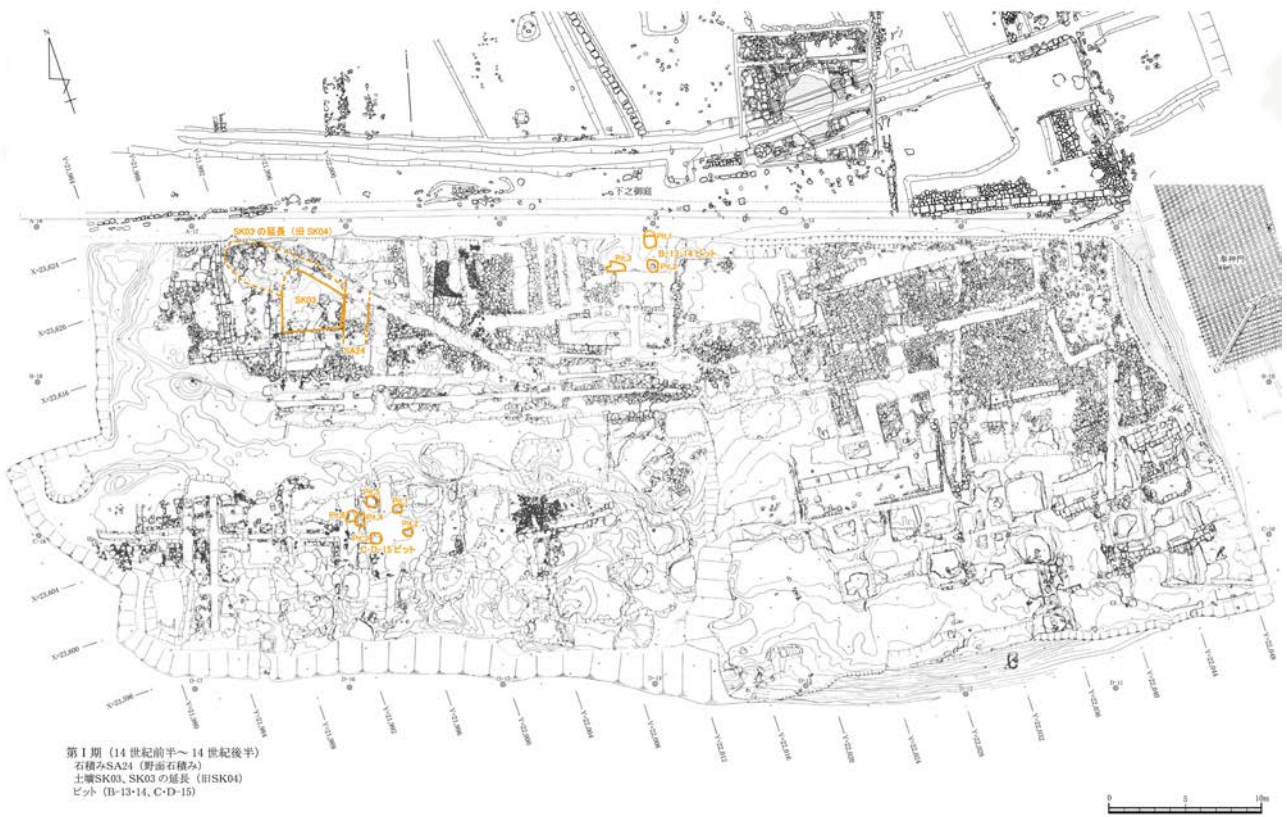
※ A: 新旧区画石積み重複ライン (野面積みの根石)  
 B: SD06-Aは岩盤直上に設置された排水溝で新区画石積みの下位に位置する。

第2図 京の内地区で検出された御嶽及び区画石積みから推定した京の内空間復元案

(御嶽の名称は、社団法人 日本公園緑地協会の平成11年度 首里城京の内区画調査検討委員会 第1回平成11年12月10日を参考に修正・加筆)



第3図 京の内地区 1994（平成6）年度 発掘調査区遺構全体図



第4図 京の内北地区第Ⅰ期 (14世紀前半～14世紀後半頃) 遺構の推定復元

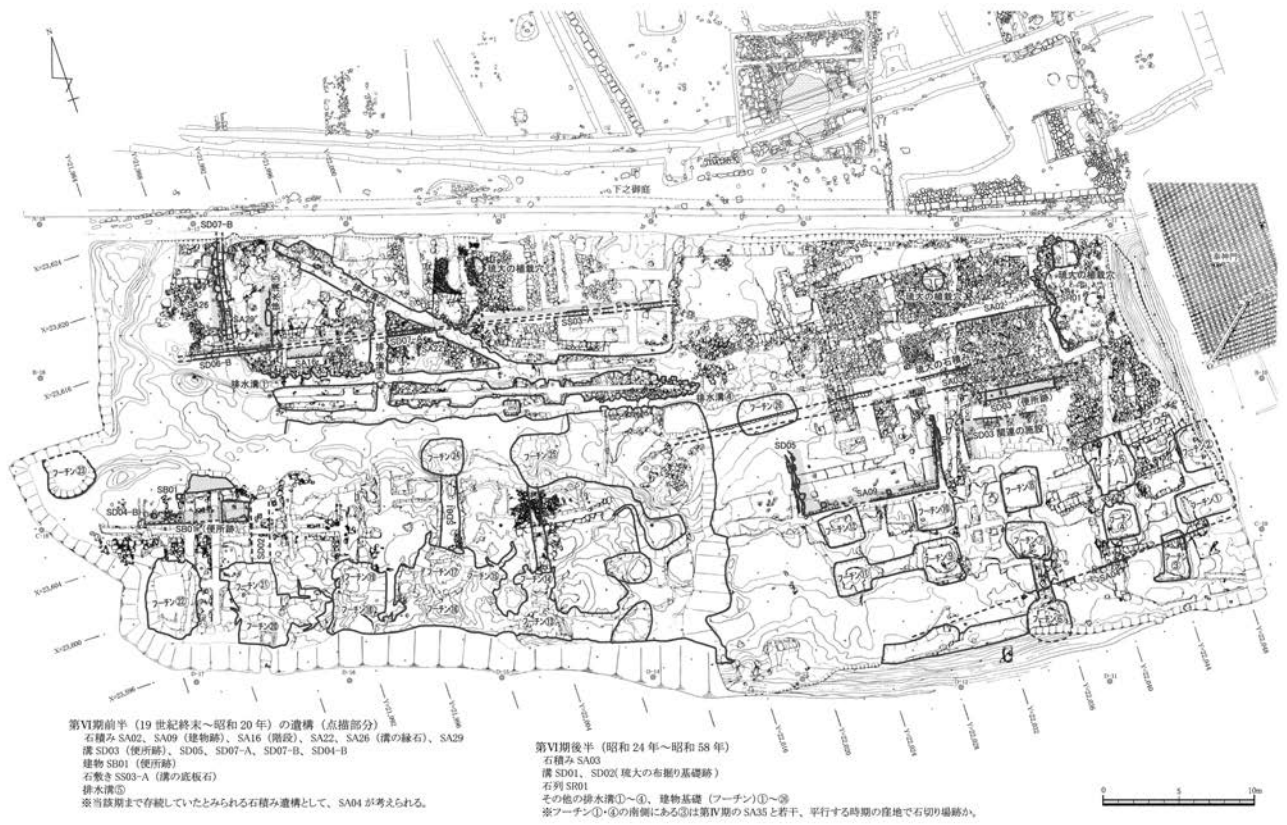


第5図 京の内北地区第Ⅱ期 (14世紀終末～15世紀前半) 遺構の推定復元

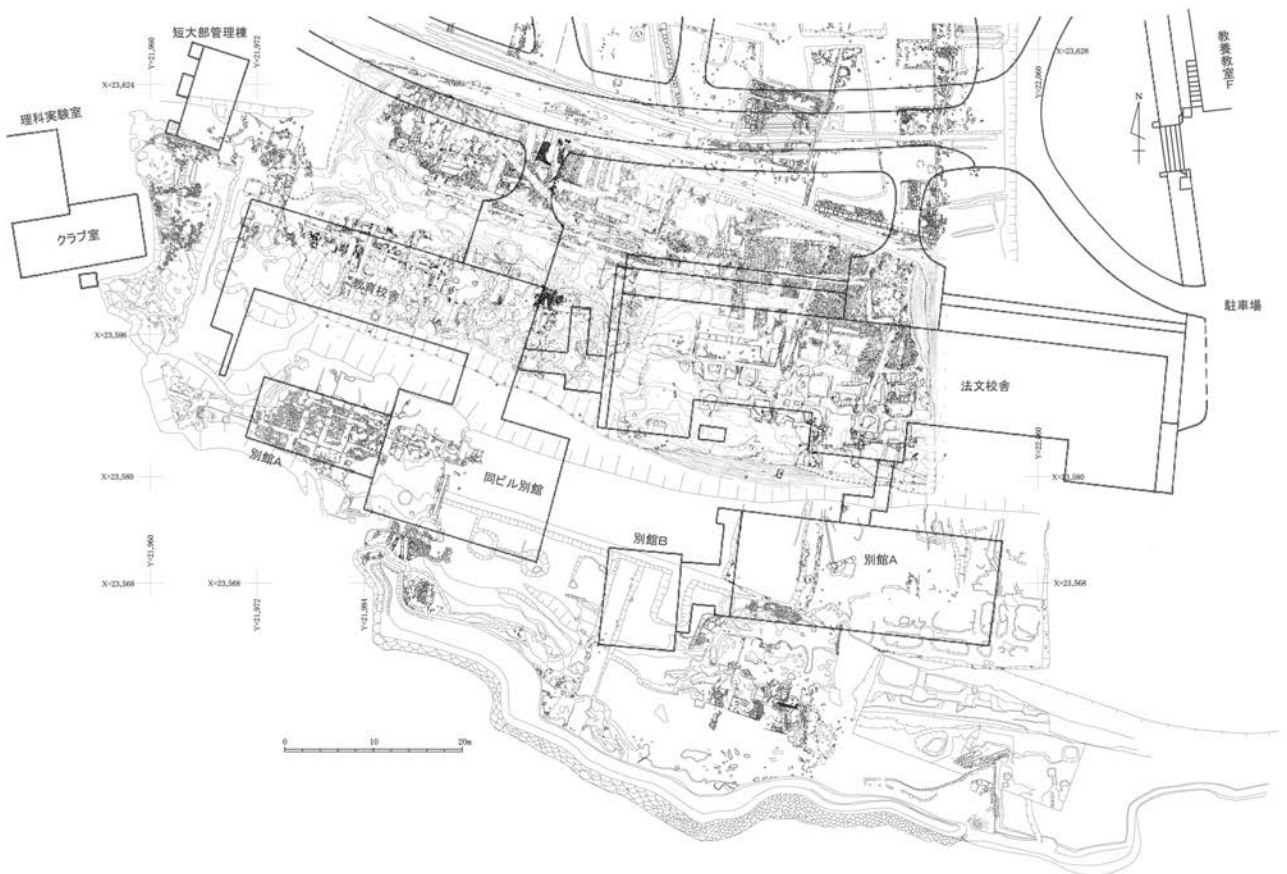


第6図 京の内北地区第Ⅲ期 (15世紀中頃) 遺構の推定復元



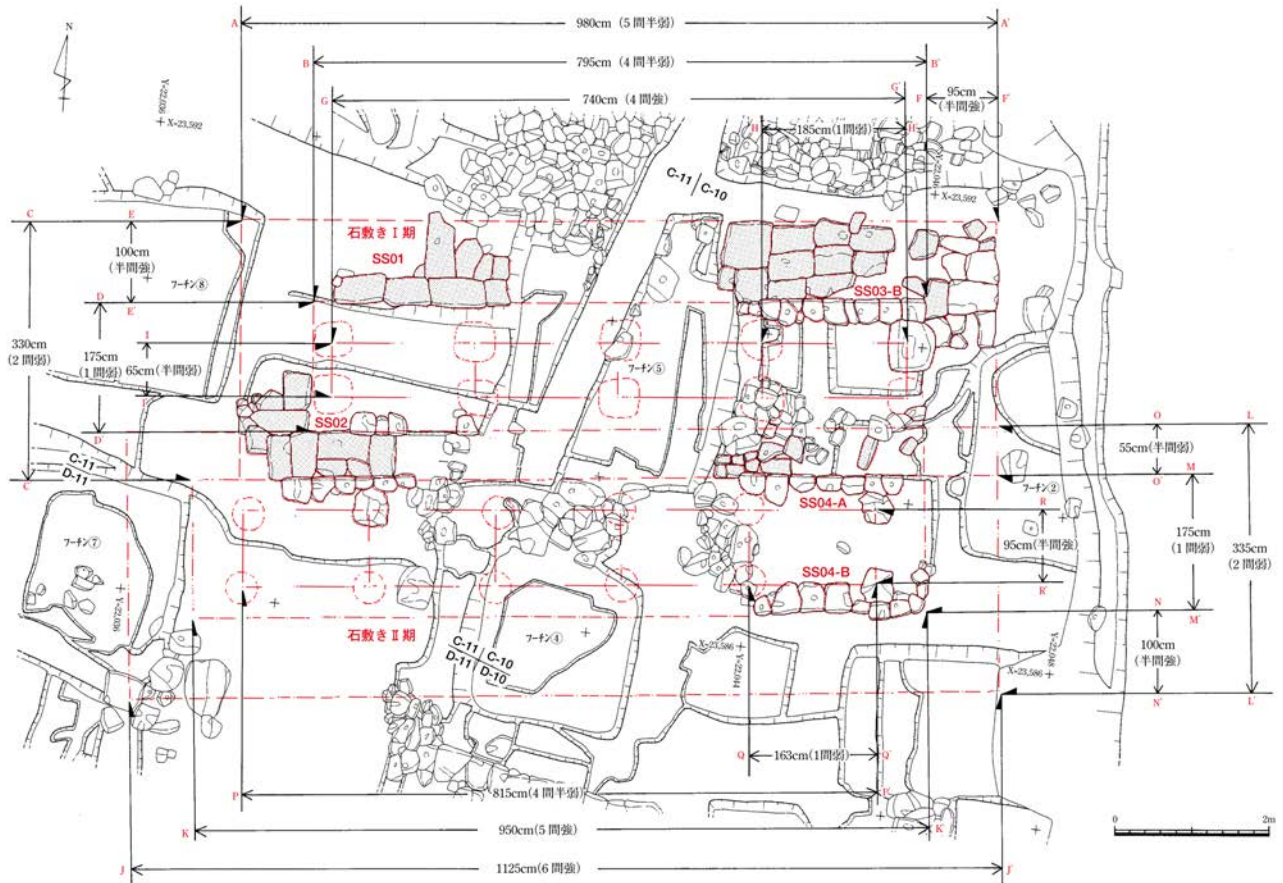


第9図 京の内北地区第VI期 (19世紀終末～昭和58年) 遺構の推定復元



第10図 旧琉球大学校舎配置図と京の内地区 (平成6～9年度) の検出遺構との重ね図





第11図 第IV期 (15世紀後半～16世紀初頭) の石敷きⅠ期 (SS01・02、SS03-B、SS04-A)・Ⅱ期 (SS02・SS04-A・B)

Ⅱ期(SS02・SS04-A・B)の規模比較

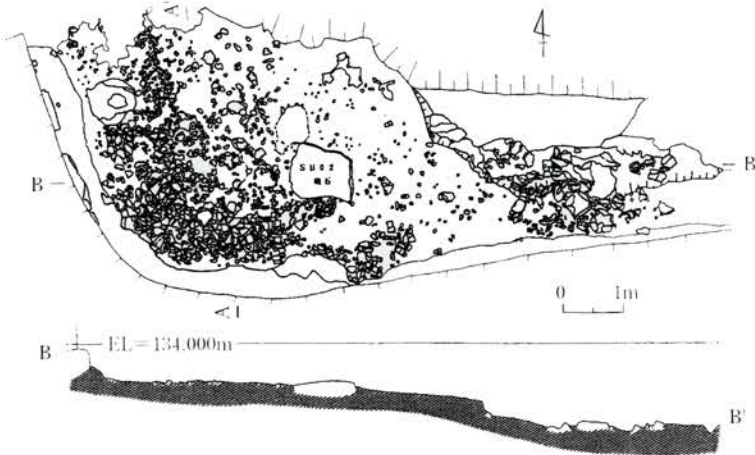
Ⅰ期(SS01・02、SS03-B・SS04-A)							
計測ヶ所		①サイズ (cm)	間数 (1間=181.8cm)	②明代(14～17世紀) 1尺=31.1cm	①・②の差 (cm)		
回廊 外側	長軸	外側(A・A')	980	5間半弱	31.5尺=979.6cm	0.4	
		内側(B・B')	795	4間半弱	25.5尺=793.0cm	2	
	短軸	外側(C・C')	330	2間弱	10.6尺=329.6cm	0.4	
		内側(D・D')	175	1間弱	5.6尺=174.1cm	0.9	
	石敷き	長軸(E・E')	100	半間強	3.2尺=99.5cm	0.5	
		短軸(F・F')	95	半間強	3尺=93.3cm	1.7	
回廊 内側	長軸(B・B')	795	4間半弱	25.5尺=793.0cm	2		
		短軸(D・D')	175	1間弱	5.6尺=174.1cm	0.9	
	礎石間	長軸(G・G')	740	4間強	23.8尺=740.1cm	0.1	
		礎石間(H・H')	185	1間強	6尺=186.6cm	1.6	
	礎石間	礎石間(I・I')	65	半間強	2.1尺=65.3cm	0.3	
Ⅱ期(SS02・SS04-A・B)					Ⅰ・Ⅱ期の比較		
計測ヶ所		③サイズ (cm)	間数 (1間=181.8cm)	④明代(14～17世紀) 1尺=31.1cm	③・④の差 (cm)	①・③の差 (cm)	
回廊 外側	長軸	外側(J・J')	1125	6間強	36.2尺=1125.8cm	0.8	145
		内側(K・K')	950	5間強	30.5尺=948.5cm	1.5	155
	短軸	外側(L・L')	335	2間弱	10.8尺=335.8cm	0.8	5
		内側(M・M')	175	1間弱	5.6尺=174.1cm	0.9	0
	石敷き	長軸(N・N')	100	半間強	3.2尺=99.5cm	0.5	0
		短軸(O・O')	55	半間弱	1.8尺=55.9cm	0.9	40
回廊 内側	長軸(K・K')	950	5間強	30.5尺=948.5cm	1.5	155	
		短軸(M・M')	175	1間弱	5.6尺=174.1cm	0.9	0
	礎石間	長軸(P・P')	815	4間半弱	26.2尺=814.2cm	0.8	75
		礎石間(Q・Q')	163	1間弱	5.2尺=161.7cm	1.3	22
	礎石間	礎石間(R・R')	95	半間強	3尺=93.3cm	1.7	30

参考: 石敷きⅠ期: 桁行4間・桁行の柱間寸法6尺等間、梁間1間・梁行の柱間寸法2.1尺等間。  
石敷きⅡ期: 桁行5間・桁行の柱間寸法5.2尺等間、梁間1間・梁行の柱間寸法3尺等間。

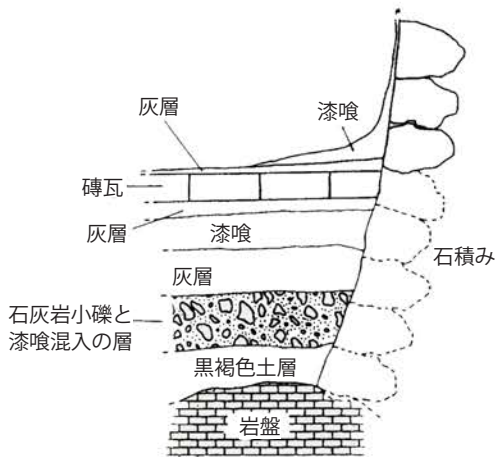
参考文献: 鎌田正・米山寅太郎 P390 『度量衡歴代 変遷表(尺・寸)』: 隋(6～7世紀)29.51cm、唐(7～10世紀)31.10cm、宋・元(10～14世紀)30.72cm、明(14～17世紀)31.10cm、清(17～20世紀)32.00cm、現代中国(20世紀)33.33cm、日本(20世紀)30.3cm』  
『大修館 漢語新辞典』株式会社 大修館書店 2001年4月1日発行。



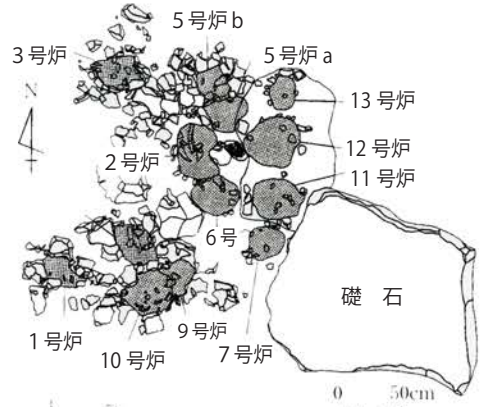
第12図A 1995年度 G-15の遺構平面 洞穴(SX01) 建物遺構(SB02)



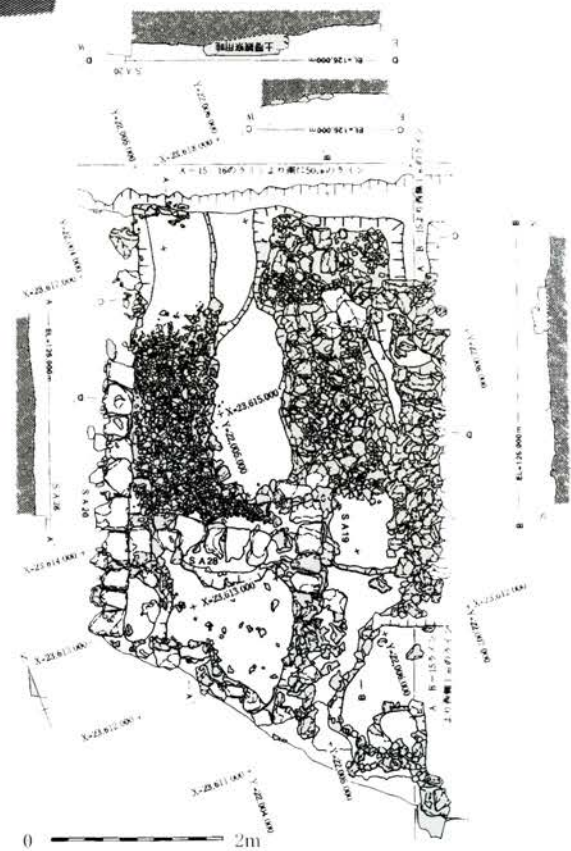
第12図B 1995年度 G-15の第2層面検出の建物遺構(SB02)



第12図D 1995年度 洞穴(SX01)の土層模式図



第12図C 1995年度 G-15 第3層面検出の青銅専用小鍛冶炉群



第12図E 1994年度 1459年失火の倉庫跡(SK01)検出直後の状況



# 今後の催しのご案内

## 企画展

平成24年2月21日(火)～3月11日(日)  
沖縄県有形文化財(考古資料)指定記念  
「古我地原貝塚・下田原貝塚出土品展」

平成23年11月16日、「古我地原貝塚(うるま市石川)」および「下田原貝塚(竹富町波照間島)」の出土品が、考古資料としては初めて沖縄県の有形文化財に指定されました。本企画展はこれを記念し、貴重な出土品を県民のみなさまにいち早く公開いたします。

## 第51回文化講座

平成24年3月10日(土)

①指定の経緯と内容について

講師：上地 博(県教育庁文化財課主任専門員)

②古我地原貝塚について

講師：島袋 洋(県教育庁文化財課副参事)

③下田原貝塚について

講師：金城 亀信(県立埋蔵文化財センター調査班長)

※先着140名 予約等不要・参加無料

## 沖縄県立埋蔵文化財センター

開所時間：午前9時～午後5時(入所は午後4時30分まで)

休 所：毎週月曜日・年末年始(12月28日～1月4日)

国民の祝日(子供の日・文化の日を除く)

慰霊の日(6月23日)

※祝日と月曜日が重なった時は、翌日の火曜日も

休所・その他臨時休所あり

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

TEL (代表) 098-835-8751

FAX 098-835-8754

URL <http://www.maizou-okinawa.gr.jp>

